障がいがある子どもの学びの権利を考える・連続学習会ごあんない

学びのクオリティ（QOL）を、どう保障していくか

～なぜ、どうして、に応えられる親になろう！！」～

●▲■　●▲■　●▲■　●▲■　●▲■　●▲■

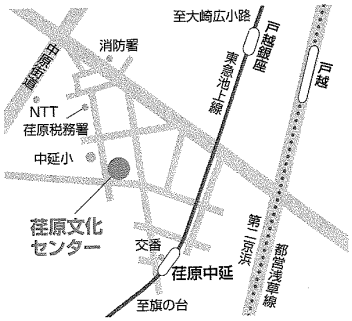
私たちの暮らすまち、小中一貫教育特区を推進する品川区では、普通学級からハンディを持つ子どもへ合理的配慮がされず、特別支援教育、特別支援学校への振り分けが見られ、誰もが共に学ぶインクルーシブ教育とはほど遠い状況を生み出しているように思われます。

昨年 11 月に行った学習会『「障害者差別解消法」を実現する―地域からつくる障がい者差別禁止条例』（講師：石毛鍈子さん）に続き、第２回目は遠山真学塾を主宰する小笠毅さんを講師に、学びに困難を抱える５歳から 50 歳代まで 130 人が学ぶ「遠山真学塾」の様子を紹介してもらい、どういった教育が好奇心を育むことへつながるのか？また、障がいのある子どもたちの学習権と教育をうける権利やインクルーシブ教育への共感をどう広げていったらよいのかを考える機会とします。

■日時：2014 年 1 月 25 日（土）14：00～16：00

「学びのクオリティ（QOL）を、どう保障していくか
～なぜ、どうして、に応えられる親になろう！！」

お話：小笠毅さん　遠山真学塾主宰



■会場：荏原文化センター　第 4 講習室
品川区中延 1-9-15　　電話 3785-1241
※東急池上線　荏原中延駅　徒歩５分

■参加費：500 円

■主催（共催）：品川・共に学び育つ社会をめざす会
品川・生活者ネットワーク

賛同：品川・地域で共に生きる会

※お申込み、お問合せは TEL：5751-7105　FAX：5751-7106　E-mail：shinagawa@seikatsusha.net

講師プロフィールは裏面に

---------- 申し込み ----------

Fax. 03-5751-7106

「学びのクオリティ（QOL）を、どう保障していくか」参加希望

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　ご住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

障がいがある子どもの学びの権利を考える・連続学習会ごあんない

学びのクオリティ（QOL）を、どう保障していくか

～なぜ、どうして、に応えられる親になろう！！」～

●▲■講師プロフィール●▲■

小笠　毅さん／おがさ・たけし

1940 年徳島県生まれ。遠山真学塾主宰。算数の水道方式（タイル算）を考案した数学者・遠山啓氏の教えを引き継ぎ、真の学び（「教える」とは共に学ぶこと。「学ぶ」とは心に誠実を刻むこと）の場としてダウン症・自閉症・LD・ADHD 等のハンディを持つ子どもの塾を開塾。
スウェーデンの学びの現場を 20 数回にわたり視察・交流、障がい者の就学や就労についても精通する。
著書に、『ハンドブック　子どもの権利条約』（岩波ジュニア新書）、『就学時健診を考える』『ハンディをもつ若者の進路』（岩波ブックレット）、『ハンディをもつ子どもの教育』（日本評論社）、『学びへの挑戦』『比較障害児学のすすめ』（新評論）など多数。

1　14版　2013年（平成25年）9月22日（日）　毎日新聞・朝刊

ストーリー

「落ちこぼさない」

――算数の「水道方式」継ぐ私塾

およそ半世紀前、一人の数学者が新しい算数の指導法を生み出した。量を土台に「数とは何か」を教えたうえで、暗算中心ではなく筆算で計算を習熟させるというものだ。いまでは学校教育に部分的に取り入れられているが、当時は、明治以来の教え方の伝統に真っ向から対立したため、異端視され、文部省（当時）から露骨な嫌がらせも受けた。それでも世の母親や現場の教師に支持され、全国に広がった。算数の指導法が社会的な〝事件〟として注目を集めたことは後にも先にも他にない。

この指導法「水道方式」を提唱したのは東京工業大教授だった遠山啓（ひらく）。彼は「子どもたちは落ちこぼれるのではなく、『落ちこぼされる』のだ」と、点数で競わせる学校の競争原理と序列主義を批判した。晩年、自らの考えを実践するため、競争原理によって疎外された障害児の教育に力を注いだ。そして、1979年に70歳でこの世を去った。志半ばだった。

遠山の遺志を継ぐ私塾がある。東京都武蔵野市の「遠山真学塾（まなびじゅく）」。学びに困難を抱える5歳から50代までの約130人が学ぶ。

ある週末、公立中1年の普通学級に通うダウン症の女子生徒（12）が、左右が等記号（＝）で結ばれた等式の性質を学んでいた。「左のお皿から1個とったら、右からも1個とらないと、同じ重さにならないよね」。塾講師からこう説明を受けながら、生徒は釣り合ったてんびんの左右の皿から、1個ずつ分銅をとっていく。「釣り合った！」。笑顔がぱっと輝いた。

入塾は5歳。掛け算の九九は、塾の教材の九九カードで楽しみながら覚え、小学2年の冬にマスターした。「九九、合格したよ」。母（48）は娘の弾む声を覚えている。「塾の先生はこの子を、親と一緒に信じてくれているんです」

主宰の小笠毅（つよし）さん（73）は、脱サラしてこの塾を開設した。「大の算数嫌い」で算数・数学とは無縁の生活を送っていた彼の人生を変えたのは、生前の遠山との交わりだった。

「人間、良い出会いがあれば変わるんだ。変わってみたら面白かった」

今年12月で開塾から30年。高名な数学者と算数嫌いのサラリーマンの人生は、どう交錯したのか。二人には、どんな子どもにも可能性があるという、揺るぎない信念があった。

4面につづく

「釣り合った！」。てんびんを使って等式の意味を学ぶ中学1年の女子生徒＝東京都武蔵野市の遠山真学塾で小出洋平撮影

きょうがわかる　ニュースのとびら